

上絵付けによる表現活動と子どもの発達について

About a relation between Artistic activities by China-Painting and Child Development

鎌田千佳(千葉敬愛短期大学)

Chika KAMADA (Chiba Keiai Junior College)

(キーワード)

表現活動、発達、関連づけ、日常生活、

1. はじめに

筆者は自らの興味から磁器の上絵付け(ポーセリング)の技術を数年にわたり習得し、創作活動を継続している。この磁器の上絵付けを子どもにも体験してもらおう「子どもの絵付け体験教室」を始めて8年目を迎えた。これまでを振り返り、この表現活動が子どもの発達に強く関連づけられていることを改めて分析し、子どもの発達の視点から、今後の保育者養成の音楽表現指導への可能性を考えてみたい。

2. 実践報告

(1) 参加者

これまでの参加者は0歳児～12歳。

乳児の場合、手形のプレート作成が多く、本人の表現活動とは言えないため、今回の分析対象者は、自ら色をつけ、作品作成とした2歳児～とする。

最多4名で1グループ。年齢別には分けない。

(2) 実践時期

年に2, 3回不定期に開催。3月、6月、11月のいずれかに開催することが多い。

(3) 絵付けの準備、方法

1) 水溶性のメディウムで溶いた絵の具

2) 使用する色:

赤、青、黄、緑、の4色。季節により、青と緑は彩度・明度の違う色を使用。

3) 絵筆はそれぞれの色専用で準備。

絵筆は洗わない→絵の具の調整が子どもには難しいため。

- 4) 色は混ぜない。→焼成の際の変色を避けるため
- 5) テーマは自由
- 6) 描き直しはしない。(原則、修正はしない)
- 7) 何に描くかは自由。お皿、カップ、蓋物など

(4) 作品

800度で焼成後、本人にお渡し。作品は、ほとんどの家庭において日常生活で使用されている。

3. 分析と考察

(1) 参加者の子どもの視点から

a) テーマ

- ・好きな物;食べ物、乗り物、キャラクター、動物、形など
- ・愛する者:家族、ぬいぐるみ(図1)など
- ・楽しかった経験:バーベキュー、キャンプなど
- ・感じたこと:季節(図2)、季節の行事から
- ・オリジナルの模様

b) 必要な力、養われる力

創造力、想像力、発想力、工夫する力、対象物に対する観察力、愛情、感情を表すための表現力、配色に対しバランス力、表現力、

c) 参加のための準備:何に何を描くか。

事前に各家庭で絵付けを話題にし、更に下絵を準備する子どももいる。これは家庭での話題と親子の

共同作業による共通の時間を持つことで、親子のコミュニケーション、信頼関係の築きと、保護者が子どもの発達過程（興味の方向、“できること”の確認など）の気づきのきっかけとなっている。

子どもは、保護者からの言葉により意欲と観察力、好奇心、学習への興味を持つ。

(2) 参加者の保護者の視点から

- a) 描いている姿から：集中力、色への興味、
b) 仕上がった作品から；

日常生活からは気付かなかった子どもの感性や性格を知る。（繊細さや興味の対象）

描き方やテーマの変化：

継続の参加により、同じテーマでも描き方の変化で技術的成長、内面的成長を実感。

- c) 日常生活の中での子どもの様子：

- ・お手伝いをするようになった。
- ・食べ物の好き嫌いに良い変化があった。
- ・物を大切に扱う、感じるようになった。

- d) 家族との関わり

子どもと共有する時間の少ない父親や、共働きの両親にとって、共有するツールとしての役割を果たす。又、気に入った作品を祖父母に贈ることから、物欲より愛情・気持ちに重きをおく豊かさを得る。

(3) 指導者の視点から

年齢の違う子どもを同じ時間に活動させることにより、互いに意識する良い影響がみられる。年下は憧れと共に年上と一緒に活動していることに喜びを感じ、集中力が増す。年上は年下へのいたわりや見守る気持ちを持つことで、作品にやわらかさや優しさがプラスされる仕上がりとなる。この環境に関わる力を刺激されることにより、人間関係、協調性、好奇心など、社会的な学びにつながると考えられる。

活動中の子どもはそばにいる保護者に対して甘えや依存する態度は見られず、高い集中力と自立心がみられる。又、同時に指導を受けている他者の姿を見て感じ、自分も興味をもった表現技法に対して、好奇心と挑戦力を発揮し、直接指導していない技法による作品を仕上げる子どももいる。自分のおかれ

た環境から、間接的な、しかし自発的な学びに対する高い意識を持つ様子に気づく。

子どもにとっては「何に描くか」より「何を描くか」（テーマ）の方がこれまでの観察で重要度が高くみられる。これはテーマに対する愛情や情熱、こだわりが強いからと考えられる。（例：家族、ペット、楽しかった経験など）

しかし、描きたいテーマを漠然と決めてきた子どもや、何も考えてこなかった子どもは、実際に白磁（お皿など）を目の前にすると、本人も気づかない勢いのある新鮮な気持ちと発想が出て、魅力的な作品に仕上がることも多々ある。

これらの自由な発想力は、経験や興味が土台にあると考えられ、表現活動が与える発達への影響の根本は日常生活の質に大きく関係があると考えられる。

4. まとめ

上絵付けによる表現活動は、形のある目に見える作品が手元にあることにより、子ども本人も保護者にも発達への影響や効果がわかりやすく実感できるといえる。だが、表現する手段の違いがあっても、音楽表現活動も発達への影響は同じではないか。

全ての表現活動が与える発達への影響は、日常生活からの経験・体験からの興味が表現活動への意識や興味に非常に強く関連し、子どもの発達段階においては生活＝生きること全てが必要なことといえよう。

質の良い表現活動が質の良い発達に繋がり、そして、その質の良い発達がまた豊かな表現活動に繋がる。この互いに関連し循環していることを意識し、子どもの発達状況を見極める力を持つ指導者を養成できるよう、音楽表現の角度からの指導を工夫してみたい。

【作品介绍】



図1 「パンキー」
6歳男子作品 20cm 丸皿



図2 「秋」
5歳男子作品 湯呑